
銀魂一封

かわちや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂―封

【Nコード】

N3478H

【作者名】

かわちや

【あらすじ】

あのマダオから、あのマダオに見護る一人の女の子の存在が出来た。そしてそこからまたマダオはマダオになってゆくのである…そしてまた今までに関わって来た人達を巻き込んでゆく。

風ノ子（前書き）

シリアスダーク、オールキャラ目指します銀時中心夢小説です。暴力、血、表現が苦手な方はお帰り下さい。暴

風ノ子

【人の命は一度在り】

♪~~~~♪~~~~♪~~~~

マダオのテーマが流れる。

マダオ、

マダオ、

マダオ

と、関わり合う人間全員からこう言われ続けてもう3年は過ぎたであらう…。

なんて、悲しい運命なのだ…。
俺は、マダオからは死ぬまで
逃れない。

新しい職場に就いて早、3日。

奇跡的に順調に3日を過ごせた訳だ、とりあえず目標は1週間だ。

例え、あの親しみのある連中だろうと

もうこれ以上俺の出稼ぎは邪魔させないぜ。

そして今の俺には、少し気になる一人の女の子が毎日だいたい同じ
時間に立ち読みをしに来るのを最後まで見護る権利を与えられたのだ

まるで万事屋の旦那、銀さんのようだ
何処からか雰囲気からも似ている。

たった、

3日

気になる

ほっとけない存在になっていたのに気付くのはまだ先の話…

その女の子が入って来た

「いらっしゃいませー」

黒髪のショート、そして黒色中心の彼女に良く似合う珍しい模様付きの浴衣

「長谷川、雑誌コーナーの方用チェックなあー！レジは田中さんに変わって貰えー」

「は、はい！了解です！」

奥に居る防犯カメラをすかさずチェックしている店長から命令を受け、彼女も他には後会社が休みっぽい男性が2、3人。

俺はそのまま彼女の隣にうずくまるように座り、荒れた雑誌の位置を綺麗に並び直すふりをしてぼそっと思いつき彼女に声をかけてきた

「君……、まだ学生だよな。学校は？行っていないのかい？」

無視された。

彼女は、1ページをめくった。

「ごめんね、おじさんこういうの嫌いなんだけど店長が君の事何も知らないのに悪い方向に眼を向けてるんだ……これは俺からのアドバイスなんだけど、雑誌読んだら100円以外でもいいから何か1つ商品買っていったほうがこっちはこっちで少しは機嫌良くなってくれるんだあ。どうかな？おじさんのプチアドバイス講座、役に立ってくれば嬉しいんだけどね。」

数分後：

彼女は、板チョコを1つ手に持って俺の前を通り少し前で止まりその板チョコを上げて俺に見せた

「ありがとう、店員さんの長谷川さん。また来るよ、ちなみに学校も会社もいってないから親孝行じゃない最悪のぷーたろう娘です」

「ありがとうございましたーまたどうぞー」

俺は無我夢中に頭を真っ白にして、店を飛び出した

「お嬢ちゃん!!」

「！」

「びっくりさせてごめんよー。もし悩みがあるなら、ウチの知り合いがやってる万事屋、つまり何でも屋なんだけど。相談でも話でもしてみるといい。少しは楽になる、騙されたと思って行ってごらん。とても珍しい店の主達がひょっこりと住んでるからさ、俺の薦めの店だ。中の作りは古い方だけだな」

「ありがとう長谷川さん、声かけてくれて…長谷川さんみたいな男の人初めて」

「へへ、そうかい？照れるなあ」

「待ってるよ、お嬢ちゃん」

「ありがとう」

「なんて悲しい背中をするんだい…お嬢ちゃん…是非神楽ちゃんと友達になって欲しいものだよ…」

そろそろ雨が降りそうだ…
ビニール傘、買って帰ろうか…

「待ってるよ、お嬢ちゃん」

「ありがとう」

「なんて悲しい背中をするんだい…お嬢ちゃん…是非神楽ちゃんと友達になって欲しいものだよ…」

そろそろ雨が降りそうだ…
ビニール傘、買って帰ろうか…

ガラガラ：

「あ。銀さん、おはようございまーす。丁度出来ましたよ朝ごはん、ちやつちやつと食べて下さい。あれ神楽ちゃんは？まだ寝てるのかなあ」

と、いつものように相変わらず家族の面倒を見るお母さん役の新八は神樂の寢室の方向へ両手作業しながら顔だけを振り向かせる

「銀さん、暇だったら神樂ちゃんの様子見てきて下さい。昨日の番から寒い寒いって言ってましたからもしかすると風邪引いたかも…」

「あー?? 何で俺がア、たく…面倒せエなアお子ちゃまはよオ。」

「アンタも立派なお子ちゃまだよ!」 小声で銀時の背中に今までのストレスとこの言葉をグイグイと押し付けてやった。

「おい神楽ちゃん。サンタさんが大量の氷を持ってやって来たよーん。」

ガラガラ…

「どんなサンタさんだよコンチクショ〜。」

ゴッ。

「ウゴイツ。」

神楽が相変わらず寝室にしているタンスの扉を右へ開けた同時に、神楽の寝相悪さ抜群の右足がそのまま銀時の顔面に直面してしまった。

かなりキツそうなひび割れた音が聞こえたが銀時は大丈夫だろうか…。

「あー銀ちゃんおはよう、元気にしてたか？趣味が甘党摂取な主人公」

「う……………はははははー、神楽ちゃん。昨日は頭痛ーい頭痛ーいってずっと言ってたわりには全然問題なさそうじゃないのお。」

今日1日大人しく寝てろッ!」

バンッ!」

風ノ子（後書き）

ご感想、楽しみにお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3478h/>

銀魂一封

2010年10月9日21時46分発行